

## “詩”は“DX”である：内部統制の手續としての「文」

佐々木 正清（二松学舎大学大学院）

古代中国、とりわけ魏晋南北朝以前の“詩”や“賦”などは、儒教的価値に基づく統治のために使われた公文書としての「文」であるとの解釈がある。標題において“詩”と引用符を付したのは、本発表における“詩”が現代日本語の「詩」即ち poem や sonnet の訳語たる「詩」ではなく、「文」の代表としての“詩”だからである。

DX には様々な定義づけがなされているが、企業の内部管理業務に携わった発表者の経験に基づくと、その実態は「業務・組織・プロセスの変革」であり、記号論的表現をすれば Signifiant（記号表現）と Signifie（記号内容）との関係に係る共通認識を構築していく作業に他ならない。例えば、重要書類や証憑を PDF 化しただけでは、DX が実現されたとはいえない。これだけでは紙の書類を引き出しに放り込んだままであるのと同じ状態だからである。一方で、会計処理が紙ベースの手作業であったとしても、業務フローが適切に整備されていて、いつでも適切な会計処理 IT システムに「載せる」ことが可能な状態であれば DX は既に完成していると考えられる。

企業統治（コーポレートガバナンス）についても同様で、経営判断に必要な情報を類型化し、様式・項目・書式を定型化して判断権限・基準を定めておかなければ、電子決裁システムに「載せる」ことは不可能である。DX の品質水準は、デジタルやインターネットや AI などの技術の優劣ではなく、事務手続書やシステム機能要件を整備する作業品質の優劣により決定づけられるのだ。

“詩”が発生し、「文」として整備され始めた時代の情報処理技術は人間の声である。当時、文字があってもそれが使用を許される人間や場面は限定されており、紙もまだ使われてはいなかったであろう。このような環境のなかで、組織統治の質を向上させるために、現代人が書面様式を定型化するのと同様に、声色や旋律あるいは発声量などの様式を定型化するという手續を開発したのだと考えれば、これは現代のデジタル・サイバー技術に相当する人間の声という技術を前提とした高品質の DX だと考えるのである。

人間は古代から、時代ごとの情報処理技術に対応した DX の努力を継続しており、その成果がさらなる技術の発展を促しているのではないだろうか。

### 参考文献

牧角悦子『経國と文章：漢魏六朝文学論』（汲古書院 2018 年）

経済産業省『デジタルトランスフォーメーションを推進するためのガイドライン』（DX 推進ガイドライン）Ver. 1.0 [https://www.meti.go.jp/policy/it\\_policy/dx/dx.html](https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/dx/dx.html)

鳥羽至英『内部統制の理論と制度－執行・監督・監査の視点から』（国元書房 2007 年）